

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：32802

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884074

研究課題名(和文) 中世真言宗における「東寺」教団の宗教的活動についての研究

研究課題名(英文) The research for the religious activities by the 'TOJI group'

研究代表者

西 弥生(Nishi, Yayoi)

東京女学館大学・国際関係学部・講師

研究者番号：50459939

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、東寺・醍醐寺・仁和寺を主軸とする「東寺一門」のあり方について、教相(教義)と事相(教義に基づく実践としての祈禱)の二面から検討した。醍醐寺・仁和寺によって支えられた教相により、中世社会における一大勢力となった「東寺一門」がいかに発展を遂げていったのか、その「実態」を辿り、真言宗としての基盤形成の一端を明らかにした。その上で、弘法大師の行状の延長上に真言宗の歴史を語った絵巻「弘法大師行状絵」によりながら、真言宗の歴史がいかに「叙述」されたのかということについても検討した。

研究成果の概要(英文)：With this Research, it made clear using both the JISOU(Prayer) and the KYOUSOU(doctrine) about the aspects of 'TOJI group' which is mainly organized by TOJI, DAIGOJI, and NINNAJI temples. To research how was the 'TOJI group' made progress remarkably by both the JISOU supported by DAIGOJI, NINNAJI temples and the KYOUSOU supported by TOJI temple will be made to clear the situations.

研究分野：日本中世史

キーワード：東寺 醍醐寺 仁和寺 事相 教相 弘法大師 泉宝 賢宝

1. 研究開始当初の背景

(1) 公武権力と密着して宗教的活動を展開し、存続してきた真言宗は、日本仏教の軸をなす重要な宗である。真言宗は、教相(教義)と事相(教義に基づく実践としての祈禱)を柱とする多彩な仏教儀礼を行い、大きく発展を遂げた。教相については、仏教学の立場からの研究蓄積はあるが、教義内容の検討に終始し、教相の果たした社会的役割についての関心は希薄であった。事相については、歴史学において、政治史の一環として世俗権力側の視点から論じられてきたが、仏教儀礼の世俗的意義に論点が著しく偏っている。したがって、事相・教相について、寺院側の視点に立った社会史としての体系的な研究は皆無といえる。

(2) これまで真言宗の事相・教相に着目してきた中で、東寺と並ぶ真言宗の中心寺院である醍醐寺や仁和寺の僧侶も「東寺」僧を自称しており、しかも「東寺」僧を名乗る僧侶は地方寺院にも及んでいるという注目すべき事実気づいた。東寺については膨大な先行研究があるが、そのほとんどは個別寺院としての東寺に関する研究で、諸寺院からなる「東寺一門」という枠組みでの体系的な研究は皆無に等しい。この「東寺一門」が事相・教相を軸に展開した宗教的活動についての研究は、真言宗史の解明に必須である。そこで本研究課題を設定し、「東寺一門」の宗教的活動について事相と教相という両面から体系的に解明することで、中世真言宗の構造と存在意義を明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

(1) 「東寺一門」という概念の確立過程の解明

東寺の住僧でない僧侶にも「東寺一門」としての意識が共有されたが、「東寺一門」という概念はもともと確固たる定義をもたない。そこで、この概念がいかんにか意味づけされ、社会的に定着したのかを解明する。

(2) 「東寺一門」の事相に基づく活動実態の解明

中世社会が真言宗に期待した現世利益を、「東寺一門」は事相の法会を通じていかんにか実現したのかを明らかにする。この問題は、(1)の「東寺一門」という概念の確立とも密接に関連

するため、一体的に検討する必要がある。また、真言宗では、事相に基づく法流の伝授が最重視された。真言密教の嫡流を継承する醍醐寺や仁和寺と、嫡流の相承拠点にならなかった東寺との関係性を検討し、「東寺一門」の内部秩序を解明する。

(3) 「東寺一門」の教相に基づく活動実態の解明

「東寺一門」の中で、事相面で醍醐寺や仁和寺に圧倒されていた東寺は、教相に力を注ぐことで存続を図った。特に、南北朝時代に活躍した東寺観智院の泉宝・賢宝は碩学として著名である。泉宝の活動については、櫛田良洪氏『続真言密教成立過程の研究』(山喜房仏書林、1979年)において、「泉宝は事教二相の一致を苦慮しながら独特の教学体系を造り上げようとした」と指摘される。確かに泉宝・賢宝は、事相を無視していたとは考えがたく、事相との連携を意識して教相を修学していたと推測される。そこで本研究では、東寺教相の実態と、醍醐寺や仁和寺が主導した事相との関係性を解明する。

(4) 事相と教相の包括的検討

最後に、事相と教相とを包括的にとらえ直し、中世真言宗の宗教的活動の全体像を明らかにする。具体的方法としては、弘法大師の生涯という枠にとどまらず、「東寺一門」の歴史を語る絵巻として、東寺観智院賢宝が中心となって編纂した「弘法大師行状絵」に、「東寺一門」の事相と教相にわたる権威がいかんにか表現されているかを考察する。「東寺一門」に対する社会的評価に少なからず影響を及ぼした歴史「叙述」と、「東寺一門」の歴史の「実態」とを比較検討し、「史実」と「叙述」の両面から「東寺一門」の宗教的活動を再評価するとともに、中世真言宗の構造と存在意義を解明する。

3. 研究の方法

東寺・醍醐寺・仁和寺を三つの柱とする「東寺一門」の宗教的活動について、事相・教相の両面から解明するために、初年度は事相を、次年度は教相を中心に検討し、最終的に事・教両相を包括的にとらえ直すという方法をとった。

(1) 平成25年度には、真言宗諸寺院において共有された「東寺」僧としての意識が、いかなる過程で社会的に定着し

たのかを跡づけ、また、「東寺」概念の定着と密接な関係をもつ問題として、真言宗の事相の基礎確立までの過程についても一体的に検討するという方法で研究を行った。

- (2) 平成26年度には、東寺を拠点に発展した教相の実態と、真言宗内における東寺教相の受容の実態を検討し、最終的には、事相・教相に基づく宗教的活動の大まかな全体像を明らかにするという方向で研究を行った。特に、これまで検討してきた事相・教相の実態と、絵巻「弘法大師行状絵」に叙述された「東寺一門」の歴史とを比較し、その二面性をふまえて「東寺一門」を再評価するという方法をとった。

4. 研究成果

- (1) 平成25年度には、拙稿「中世寺院社会における「東寺」意識」(三田史学会『史学』第81巻、2012年)において一部検討した「東寺一門」としての意識の萌芽の内実をふまえ、真言宗諸寺院において共有された「東寺一門」僧としての意識が、いかなる過程で社会的に定着したのか、跡づけを行った。また、「東寺一門」という概念の定着と密接な関係をもつ問題として、真言宗の事相(祈禱)の基礎確立までの過程についても一体的な検討を行った。

具体的な研究内容としては、12世紀に活躍した醍醐寺勝賢の「東寺一門」の僧としての活動実態を検証した。勝賢は醍醐寺住僧の中でも比較的早い段階で「東寺」僧を称した人物である。勝賢は醍醐寺の発展に寄与したのみならず、東寺長者として真言宗の事相の発展にも尽力し、さらに東大寺別当として南都における真言密教の布教にも貢献した。また、勝賢から仁和寺守覚への事相伝授の実態を辿る中で、「東寺一門」という概念の形成に重要な意味をもつ守覚撰『追記』の内容と撰述背景についても検証した。真言宗内外における幅広い活動を通じて勝賢が「東寺一門」という概念の社会的定着に果たした役割を明らかにしたことは、真言宗史の解明において重要な意味をもつであろう。

なお、醍醐寺勝賢の「東寺一門」僧としての活動実態については、『古文書研究』78号(2014年12月)に論文を発表した。

- (2) 東寺を拠点とした教相(教義)の内実について検討を行い、教相を主な内容とする「大日経疏」が論義や日常的な修学場でいかに活用されていたのかについて明らかにした。従来の歴史

学において、真言宗の事相と教相との関係性の具体相については等閑視されてきた問題であるが、事相に軸足を置く聖教と、教相を主体する聖教とが内容的にいかなるつながりをもっているのか、本研究では跡づけを行った。具体的には、東寺観智院泉宝および賢宝の手になる教相聖教の分析を行い、事相の伝授に用いられていた抄物との内容上の関連性について検討した。このことにより、中世社会において大きな注目を集めていた真言宗の事相が、教相によっていかに教学的に裏づけられていたのかが明らかになった。

「大日経疏」に基づく修学実態をめぐる研究成果については、拙稿「観智院泉宝・賢宝の教相修学と大日経疏」(『寺院史研究』14巻、2013年)を発表した。

- (3) 平成26年度も引き続き、「東寺一門」の教相に注目して研究を進めた。その際、東寺観智院に伝来する「東寺観智院金剛蔵聖教」に基づく関係史料の検出作業をより細かく行った上で、東寺教相の発展過程の解明を目指した。具体的には、東寺西院を拠点とした泉宝・賢宝の修学実態、のちに東寺教学の重要拠点となった観智院の創建の内実、泉宝・賢宝以来の観智院院主代々による修学の実態および観智院の発展過程、醍醐寺をはじめとする他寺院における東寺教学の普及の実態、といった観点から考察を試みた。論義や談義を伴う法会が行われ、「東寺一門」の僧侶間で東寺の教相を共有する場として機能した西院と、南北朝時代に新たに創建されて東寺教学の継承の場として機能した観智院との関係性については、「東寺一門」の歴史を考える上でも重要な問題であり、今後も継続して検討を行う必要がある。

また、東寺の教相は「東寺一門」を構成する重要寺院からも注目されており、一例として醍醐寺に伝存する史料群からは、教相を通じた両寺僧の交流の一端がうかがえた。加えて、東寺教学を確立させた泉宝・賢宝による諸説を、その後の観智院院主がいかにして東寺外に普及を図ったのかを検討すべく、観智院宗海や宗泉の動向に注目した。その結果、醍醐寺の重要院家である三宝院や報恩院の僧侶と、談義や教相聖教の貸借を通じて交流していたことがわかり、東寺教学の広まりの一端を明らかにすることができた。

- (4) 歴史学において、中世真言宗における

事相・教相に基づく宗教的活動と諸寺院間の秩序の「実態」については、近年徐々に明らかにされつつあるが、そのような真言宗の「実態」がいかに「叙述」されたのかということも「東寺一門」の歴史を明らかにする上で見過ごせず、中世における真言宗観を探索上で重要なテーマである。弘法大師の生涯を描く絵巻でありながらも、その延長上に真言宗全体の歴史を語るものとして、東寺観智院賢宝が中心となって編纂した絵巻「弘法大師行状絵」を素材とし、詞書がいかなる方法で、またどのような意図のもとで編纂されたのか、その一端の解明を試みた。そして、歴史の語られ方という観点から中世社会における「東寺一門」像に迫った。その成果は、拙稿「東寺蔵『弘法大師行状絵』の詞書 観智院賢宝の撰述意図」を投稿し、『佛教史学研究』への掲載が決定している。本絵巻は編纂過程を明らかにするための素材が揃っているにもかかわらず、編纂論的視点からの体系的な研究が十分に行われていないことから、今後も継続して編纂過程を詳細に検討していく必要があるといえる。

- (5) 「東寺一門」という概念は、東寺一寺のみならず、事相を前面に掲げる醍醐寺や仁和寺の僧侶が深く関与する中で形成され、社会的に定着していったが、本研究では事相を主体とする醍醐寺・仁和寺の活動実態と、教相を主体とする東寺の活動実態を総合的にとらえることで、「東寺一門」の密教すなわち「東密」の発展過程の一端を解明した。しかしながら、「東寺一門」観の変遷をはじめ、十分に解明できていない問題も多々残っているため、それらについては今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

西 弥生「観智院泉宝・賢宝の教相修学と「大日経疏」」(『寺院史研究』、査読有、第14号、49-95頁)

西 弥生「醍醐寺勝賢と「東寺」意識」(『古文書研究』、査読有、第78号、2014年、23-42頁)

[学会発表](計0件)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西 弥生(NISHI, Yayoi)

東京女学館大学・国際教養学部・専任講師

研究者番号：50459939

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし